犬がいる日常

西部中・1　三ツ矢　有亜

朝目覚めると聞こえる足音
トントン、と小さく部屋を走る。
カーテンの隙間から差し込む光
犬のしっぽがそれを弾ませる

寝癖のついた私の顔に
ためらいもなく鼻を押し付ける。
「おはよう」と言えばくるくる回る。
まるで今日が特別な日のように

犬がいるだけで部屋は明るく
何気ない朝が特別になる。
牛乳を入れる間、じっと座り、
その黒い瞳は私をずっと見ている。

散歩の準備をするともうわかる。
玄関の前で小さくはねる
リードの音に小さくなく、
「行こう」と言えば、扉の向こうへ。
風の匂いをかぎながら
あっちへフラフラ
こっちへフラフラ。
電柱の前で立ち止まり、
何か話すように尻尾を振る。

君は喋らないけれど、
その仕草一つ一つの言葉になる。
「今日は楽しいね。」
「ここ、好きな匂いなんだ」

季節が巡るたびに毛並みが変わる。
春には抜け毛がない。
夏には日陰を探して眠る。
秋には落ち葉の中を跳ね回り
冬には私の足元に丸くなる。

時々、ふと考えてしまうんだ。
あと、何年一緒にいられるのかなって。
犬の時間は私より早く流れて
その分、精一杯生きている。

犬がいるから優しくなれた。
犬がいるから寂しさが減った。
犬がいるだけで心が解ける。
そんな存在にどうやって
恩返しができるだろう

おやつをあげても
撫でても
名前を何度読んでも
それだけじゃ足りない気がするんだ。

だから今日もただそばにいるよ。

特別な事はしなくてもいい。
犬が眠るその横で
静かに時が流れるのを感じていたい。

犬のいびきが心地よい。
犬の体温が愛しい。
言葉じゃなく、姿で、声で、
犬は私を幸せにしてくれるはず

7・9